

現地視察結果

令和元年10月9日

令和元年度第4回過疎問題懇談会

1 視察行程

- ・8月19日:【始良市】平成28年度優良事例表彰大臣賞を受賞した「特定非営利活動法人 Lab蒲生郷」、
「森の学校楠学園」及び「漆地区コミュニティ協議会」における取組説明、現地視察及び意見交換
- 〃 20日:【日置市】市の地域づくり行政の取組説明、平成29年度優良事例表彰大臣賞を受賞した「高山地区
公民館」の取組説明、現地視察及び意見交換
- ・参加委員:宮口座長、太田委員、小田切委員、作野委員、高橋委員

2(1) 鹿児島県始良市の概要

- ・鹿児島県中央部に位置する。平成22年3月に蒲生町、始良町、加治木町の3町が合併。過疎地域は旧蒲生町のみ(一部過疎)。
- ・人 口 等:75,173人、31,435世帯(平成27年国勢調査)
- ・高齢化率:29.3%(平成27年国勢調査)
- ・面 積:231km²



(図は、グーグルより)

2(2) 「特定非営利活動法人 Lab蒲生郷」の取組について

(H28年度過疎地域自立活性化優良事例表彰 総務大臣賞受賞)

- ・始良市旧蒲生町をフィールドにして、地域の個人、団体とともに新たな価値を生み出すまちづくりNPOとして平成19年度に設立。
- ・会員は17名だが実質は6～7名で事業を実施。蒲生ふるさと交流館の指定管理者となるほか、着地型観光メニューの提供(カモコレ)、民話の絵本化事業、こどもの発達支援事業など、地域振興に関わる様々な事業に取り組んでいる。
- ・メンバーはそれぞれ得意分野を有しており、できることをやりきることを通じて人口減少に悩む地域に自信と誇りをもたらしている。



Lab蒲生
(写真は視察時撮影)

2(3)「特定非営利活動法人 森の学校楠学園」について

- ・ オルタナティブスクール(認可外。出席認定)として小中学部及び幼稚部を開設。
- ・ 感覚・体験・自立を重視して次世代のリーダーを目指す教育を実施。
- ・ 本年4月時点の生徒数は14名。不登校に陥った子ばかりではなく、入学前から一般的な学びの形に則さない子も入学しており、全国及び海外から生徒が集まる。
- ・ 卒業生の進路は公立高校、通信制高校、専門学校進学、海外留学など。公立高校の生徒会長もいる。



森の学校楠学園
(視察時撮影)

2(4)「漆地区コミュニティ協議会」について

- ・ 始良市は17の小学校区にコミュニティ協議会の設立を促してきており、漆地区では平成27年4月に設立。
本年4月末の人口は227人(うち65歳以上が144人)、世帯数は132世帯。
- ・ 高齢者が多いことから地域全体で高齢化に対応しており、月1回75歳以上の高齢者の自宅を訪問する見守り隊、週1回の高齢者向け健康サロン、草刈り等の要請に有償で対応するお助け隊、県内の温泉巡り等に取り組んでいる。
- ・ 小学校の存続や地域伝統の継承のためにも、増えている空き家を改修して若い人が住みやすい住環境を整備していく必要がある。



万来館における意見交換会
(視察時撮影)

3(1) 鹿児島県日置市概要

- ・鹿児島県西部に位置。平成17年5月に東市来町、伊集院町、日吉町、吹上町の4町が合併。過疎地域は旧東市来町、旧日吉町、旧吹上町(一部過疎)。
- ・人口等:49,249人、19,649世帯(平成27年国勢調査)
- ・高齢化率:32.5%(平成27年国勢調査)
- ・面積:253km²



3(2) 市の地域づくり行政について

- ・平成17年の4町の市町村合併を契機に地域づくり行政を展開。
- ・平成18年には、中央公民館(旧町ごと)、地区公民館、自治会の3層構造による自治組織を市の総合計画に位置づけ。(当時は生涯学習の場として教育委員会所管)
- ・平成23年には位置づけを見直し、条例に基づく公の施設として26の「条例地区公民館」を位置づけるとともに、同じエリアで自治活動組織として任意団体としての「(自治)地区公民館」を設け、地域づくりに軸足を置いた(市長部局に移管)
- ・市は「条例地区公民館」の管理運営について、地区公民館活性化交付金として、運営費、事務費、施設管理費、主任等人件費を交付。単年度で3,600万円程度
- ・これとは別に合併特例債を充当して造成した基金を活用して、地区公民館ごとに地域づくり振興基金を交付。単年度で1.5億円。従来はハードが中心だったが、現在はハードソフト半々としている。
- ・あわせて、各地区公民館に市の部課長級職員を一人ずつ「地域づくり協力員」として位置づけ、地区振興計画をはじめ、地区公民館による地域づくり等を総合的に支援する体制を設けるなど、市職員による「協働サポーター配置事業」を実施している。
- ・地区公民館ごとに取組が進んでいるところとそうとはいえないところがでてきており、今後の方針について市内部で検討中。
- ・なお、市は一部過疎地域だが、地域づくり行政については、過疎地域、非過疎地域同様に実施し、過疎地域については過疎債を活用する運用としている。

3(2)「高山地区公民館」について

(H29年度過疎地域自立活性化優良事例表彰 総務大臣賞受賞)

- ・高山地区(旧高山小学校区)は、日置市の最北端に位置し、人口202人(高齢化率67%)、111世帯で、高齢化による集落の維持が課題であった。
- ・廃校舎を活用して整備した交流センターを拠点に若者との交流活動や農村の魅力発信を実施。年間5,000人の交流、1,200人の体験活動受け入れを実現。
- ・平成25年に全世帯が会員となるNPO法人がんばろう高山を設立し、高齢者の送迎、買い物支援、農産物出荷等を実施。経済的な事業を実施するためには法人格があった方がよい。
- ・今後も高齢者支援サービス等を実施するほか、古民家を活用した常設のカフェの開設を検討中。



高山地区公民館における意見交換会
(視察時撮影)



峠の茶屋
(視察時撮影)



高山地区に広がる棚田
(視察時撮影)

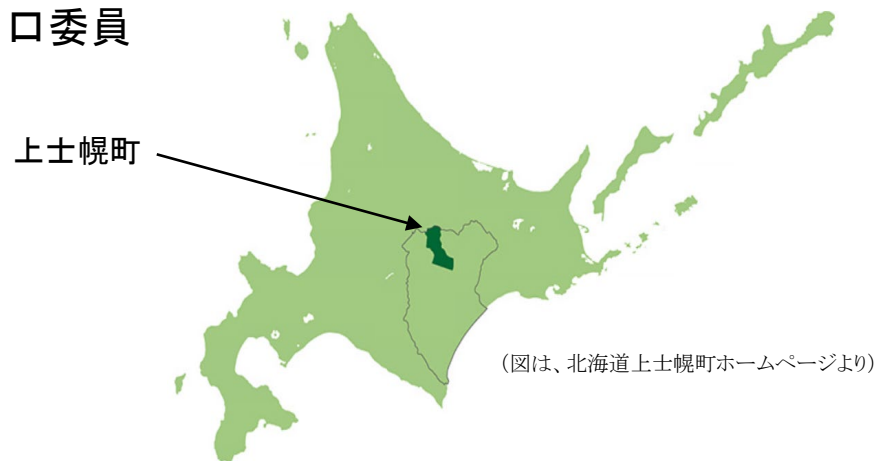
北海道上士幌町・鹿追町 現地視察

1. 視察行程

- ・9月17日:【上士幌町】「ナイトイテラス」見学、NPO法人上士幌コンシェルジュから説明聴取、上士幌町長等との意見交換
 - 〃 18日:【鹿追町】環境保全センター見学、神田日勝記念美術館見学、鹿追町長等との意見交換
- ・参加委員 : 宮口座長、青山委員、小田切委員、沼尾委員、川口委員

2(1) 北海道上士幌町の概要

- ・人口 : 4,967人、世帯数2,559
- ・高齢化率 : 35.2%
- ・面積 : 696.0km² (約76%が森林)



(図は、北海道上士幌町ホームページより)

2(2) 上士幌町の地域づくりの特徴

- ・スロータウンの理念のもと、豊かな自然と、ぬかびら源泉郷や公共育成牧場のナイトイ高原牧場、旧国鉄士幌線コンクリートアーチ橋梁群等の地域資源を活用しながら、健康・環境・観光と子育て・教育をコンセプトにしたまちづくりを推進。
- ・最近では、5Gを活用した畜産振興の実証実験等にも取り組んでいる。
- ・こうした取組の結果、高齢化率の上昇が緩やかになる(※1)とともに、社会増(※2)も実現。さらに、平均所得が年々上昇(※3)するなど、地域経済も活性化している。

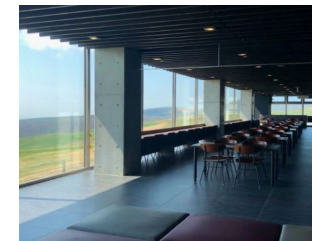
※1 35.0%(H29.4)→34.62%(H30.4)→34.3%(H31.4)

※2 H27年度～H30年度の社会増:226人(自然減100人を差し引いても116人の人口増)

※3 292万円(H26年度)→309万円(h27年度)→335万円(H28年度)→344万円(H29年度(北海道内で11位))

2(3) 「ナイトテラス」について

- ・ ナイトテラス(ナイト高原牧場観光施設)は、上士幌町の観光振興を図るために、日本一広い公共牧場であるナイト高原牧場に設置された施設(旧レストハウスが損壊したことから再建(過疎債も活用)したもので、平成31年4月に新装オープン。)
- ・ 施設の運営は、町が50.8%を出資して設立された株式会社karch(カーチ)が行っている。



(写真は、ナイトテラスホームページより)

2(4) 「NPO法人上士幌コンシェルジュ」について

(H30年度過疎地域自立活性化優良事例表彰 総務大臣賞受賞)

- ・ 官民連携で移住促進を図るべく、町内の有志により、平成22年に設立。
- ・ 移住希望者を対象とした上士幌町での生活体験者数は、事業を運営してから飛躍的に伸びており、平成23年度から平成29年度の7年間で、286組717人が参加。
- ・ 移住者が地域に溶け込み安心して暮らせる環境を整えるため、移住者が開催する誕生会やフリーマーケット、仮装盆踊り等様々な交流会やイベントを支援し、地元町民と移住者を繋ぐ役割も担っている。
- ・ 特産品の開発や販売をはじめ、ふるさと納税による特産品の発送により、地域の特産物を活かした都市と農村の交流促進にも積極的に取り組んでいる。



(写真は、優良事例表彰パンフレットより)

2(5) 「hareta」について

- ・ 空き店舗を起業家支援のためのスペースに改修したもの。交流施設としても活用されている(令和元年8月オープン)。

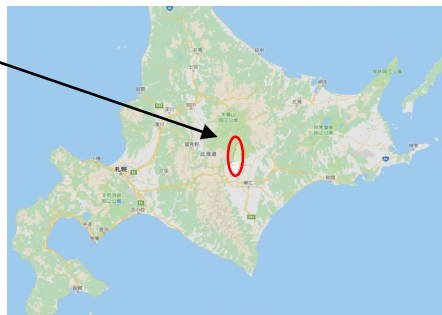


(写真は、haretaホームページより)

3(1) 北海道鹿追町の概要

- ・人口: 5,503人、世帯数2,488
- ・高齢化率: 29.0%
- ・面積: 404.7km²(約50%が山林)

鹿追町



(図は、グーグルより)



神田日勝記念美術館(写真は、ホームページより)

3(2) 北海道鹿追町の地域づくりの特徴

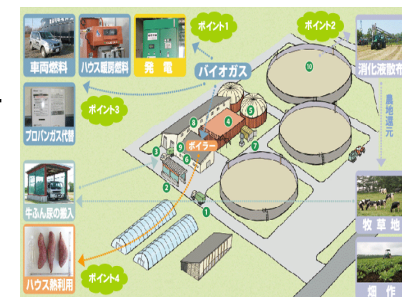
- ・バイオマスプラントを整備し、資源循環型農業を推進。また、地産地消や食育の推進のほか、美しい農村風景と自然の魅力を生かした観光交流にも力を入れている(平成25年に日本ジオパークに認定)。
- ・町独自の幼小中高一環教育を導入しているほか、自然体験留学制度にも取り組んでいる(自然体験留学制度に関しては、児童・生徒10名が入所する全寮制の自然体験留学センターや親子留学専用住宅も整備。)

3(3) 「鹿追町環境保全センター」について

- ・観光客が増加する中、市街地を中心に乳牛の糞尿の適正処理を求める声が高まったことを受けて、乳牛糞尿はもとより、市街地から排出される生ごみや下水汚泥を処理するとともにバイオマス資源として有効利用を図るため、バイオガスプラントを核とした鹿追町環境保全センターを平成19年10月から稼働(平成28年4月からは町内2基目となる「瓜幕バイオガスプラント」が稼働。)
- ・バイオガスプラントの処理過程で生産される消化液は、有機質肥料として活用されるだけでなく、臭気の改善にも役立っている。また、バイオガスから電気と熱を生産し、再生可能エネルギーとして有効に活用。
- ・余剰熱を活用したチョウザメ飼育とマンゴーの栽培事業を展開するなどして、新たな雇用を創出しているほか、バイオガスから水素燃料を製造し、貯蔵・輸送・供給までの一貫した水素サプライチェーンの構築に向けた実証実験にも取り組んでいる。



(視察時撮影)



(写真は、ホームページより)